



TITLE:

# エヴェンキ語、ヤクート語及びブリヤート語における人称接辞を伴う副動詞形について

AUTHOR(S):

松本, 亮

---

CITATION:

松本, 亮. エヴェンキ語、ヤクート語及びブリヤート語における人称接辞を伴う副動詞形について. 京都大学言語学研究 2005, 24: 153-183

ISSUE DATE:

2005-12-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/87852>

RIGHT:

## エヴェンキ語、ヤクート語及びブリヤート語における 人称接辞を伴う副動詞形について

松本 亮

### 0 はじめに

本論文は、エヴェンキ語<sup>1</sup>、ヤクート語<sup>2</sup>、ブリヤート語<sup>3</sup>の動詞人称接辞について考察する。エヴェンキ語とヤクート語、ブリヤート語に共通して見られる“副動詞形に人称接辞が付く”という特徴と、“形動詞形における人称接辞の現れ方”を類型論的に観察する。そして、結論として、ヤクート語とブリヤート語に見られる“副動詞形に人称接辞が付く”という特徴は言語接触によりエヴェンキ語から影響を受けたものであり、そこにエザーフェとして現れる人称接辞のある機能が強く関係している可能性があることを示す。

本論文のテーマと関連するこれまでの研究は、風間 (2003) と、V. P. Nedjalkov (1995) が挙げられる。風間 (2003) はアルタイ諸語と日本語、朝鮮語の様々な文法特徴を比較対照したものだが、ヤクート語やブリヤート語が触れられていない。また、V. P. Nedjalkov (1995) はアルタイ諸語に限らず世界の言語の *converb* (副動詞) を観察して様々な *typological parameter* を提案しているが、それらのうちで本論文において取り上げる動詞人称接辞に関する *typological parameter* は少ない。

---

<sup>1</sup> ツングース諸語に属す言語。エヴェンキ語 (民族・言語の名称については他にエウエンキ、エベンキなどあるが、本論文では“エヴェンキ”と呼ぶ。) が話されている地域は、西はエニセイ川、バイカル湖北部、レナ川上流 (オリョクマ川、アムガ川、アルダン川など)、そして東はオホーツク海に至る、東シベリアの広大な分布域に及ぶ。エヴェンキ族の人口は、約 30,000 人である。そのうち、エヴェンキ語が第一言語である割合が 30.4% (ソ連邦 1989 年国勢調査) である。

<sup>2</sup> チュルク諸語に属す言語。ヤクート語は、レナ川流域を領土とする、現在のロシア連邦のサハ共和国で話され、ロシア語と共に主要言語の一つとなっている言語である。ヤクート族の人口は約 382,000 人である。そのうちヤクート語を第一言語として持つ割合が 93.8% (ソ連邦 1989 年国勢調査) であり、シベリア諸言語の中では大言語の一つと言える。

<sup>3</sup> モンゴル諸語に属す言語。ブリヤート語はバイカル湖沿岸 (ロシア連邦のブリヤート共和国を中心とする地域)、およびモンゴル国北部において話される言語である。ロシア共和国内におけるブリヤート族の人口は 421,000 人である。そのうち、ブリヤート語を第一言語として持つ割合が 86.3% (ソ連邦 1989 年国勢調査) である。ヤクート語と並び、シベリア諸言語の中では大言語であると言える。

## 1 接触の歴史

まず先行研究をもとに、エヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語の民族的歴史、及び各言語間の言語接触について見ておきたい<sup>4</sup>。

### 1.1 エヴェンキの歴史

ツングース諸語が文字を持つようになったのはおおよそ 20 世紀からであり、他言語の文献や考古学、民俗学などの貢献によってその歴史を辿ることができる。原ツングースの起源の地については諸説あり、現在まで最も受け入れられているのはシベリア起源説で、バイカル湖南東の森林地帯であるとするものといえよう (ヤンフネン 1983: 49、加藤 1986: 179-186)。また、エヴェンキを含めツングース系諸民族は「元来トナカイ飼養民ではなく、タイガの中を徒歩で歩く狩猟・漁撈民であった」(加藤 1986: 132)。東シベリアに広く分布するエヴェンキにとってトナカイ飼養は極めて重要な要素であるが、これはバイカル湖周辺のモンゴル系牧畜民から得た知識だという<sup>5</sup>。原ツングースはバイカル湖からアムール川下流へ向かう東への移動 (南方ツングース) と、レナ川上流域の東シベリアへ出る移動 (北方ツングース) とに別れ、広範囲に拡がっていくのだが、トナカイ飼養技術を得たエヴェンキは北方ツングースに属する。こうしてエヴェンキは近代へつながる「トナカイ飼養の狩猟民すなわち、移動・運搬手段として少数のトナカイを保有しながら山野に獲物を求めて移動生活をする狩猟民」(荻原 1989: 84) という民族的特徴を持つようになったと考えられている。その後、南から移動してきたヤクートがレナ川に沿って北上しエヴェンキと遭遇するが、「定住に際して先住民であったツングース族は彼らに狩猟や漁撈を教えることもしたが、ステップ地方の伝統的牧畜文化をもつ経済力に富んだヤク

<sup>4</sup> これらエヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語に共通して見られる接触言語として、現代におけるロシア語が挙げられる。例えば次に挙げる文は、(i)がエヴェンキ語の例で、(ii)がそれに対応するロシア語である。エヴェンキ語において疑問詞が先行詞をもつ関係副詞として使われているが、本来エヴェンキ語では疑問詞にこのような用法はなく、ロシア語からの借用であることが分かる。

(i) ɣəŋə-kəl      ʃu-la-tin      idu   ʃa-l-in      in-ʃərə.      (N: (152))

行く-2sg.imp   家-all-3pl.poss   どこ   親戚-pl-3sg.poss   住む-prs.3pl

“彼の親戚たちの住む家に行きなさい。”

(ii) Poŋdi      v      dom,      gde      zhivut      ego      rodstvenniki.

go.imp   in   house.acc   where   live.prs.3pl   3sg.poss   relatives

“彼の親戚たちの住む家に行きなさい。”

しかし本論文で取り上げる現象にロシア語は関連していないと考える為、本論ではロシア語に言及することはしない。

<sup>5</sup> この根拠としてはエヴェンキ語でトナカイの乗用道具に関する言葉がモンゴル語の乗馬具と共通していることが挙げられている (加藤 1986: 133)。

ートに多くは同化吸収された」(庄垣内 1992: 51)。

## 1.2 ヤクートの歴史

次にヤクートについてであるが、ヤクートはバイカル湖の南西あたりから現在の彼らが居住する東シベリアまで北上してきたチュルク系民族である(庄垣内 1992: 51、加藤 1986: 105、ヤンフネン 1983: 49)。この根拠としては「ヤクートがブリヤート・モンゴル族によってバイカル地方を追い出されたという伝説を継承していること、チュルクやモンゴルのように牛馬飼養民であること、バイカル地方からレナ川中流域まで牛馬飼養民の移動の痕跡が考古学的立場から認められること、ヤクート語がチュルク諸語の一種であることなどが挙げられる」(庄垣内 1987: 51)。他のチュルク系民族との関係については容易に判断できるものではなく、言語の面から次のように記述されている：

ヤクート語は、チュルク語にあつてはチュヴァシュ語に次いで特異な言語といえる。他のチュルク語との接触を絶って長期単独行動をとり、その間にツングース語やモンゴル語と大きな接触をもったためと考えられる。チュルク諸方言の中でヤクート語の系統的な位置づけは簡単ではない。チュヴァシュ語のように、単独で一方方言グループを構成すると考える場合と、トゥヴァ、ハカスなど南シベリアの方言グループの成員と見なす場合とがある。(庄垣内 1987: 55)

またモンゴルとの接触については、北上途中においてバイカル湖周辺で長く接触を持っていたと見られるが、これはヤクート語に見られるモンゴル系言語からの借用語がその接触の歴史を何よりも語っていると見ることができる。そしてその時期はツングースとモンゴルの接触よりも後になってからと推測される。

また、エヴェンキ、ヤクートと接触を持ってきたバイカル湖周辺のモンゴル系民族は、古くから多くの部族の連合を取っていたオイラト系の民族と考えられる。今日のブリヤート族もオイラト族の一派であることから(宮脇 2002: 145)、本論文ではエヴェンキ、ヤクートと接触を持ってきた民族はブリヤートであると考えておきたい。

歴史的にエヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語が相互に密接な接触を持ってきたことが容易に想像される<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> また、一方で現代においても言語接触は認められる。ヤンフネン(1983)は北アジアの現代の言語共同体(言語的に定められる相互作用の地域)について5つの主要な言語地域に分類し、さらにより小さい地域に下位分類している。その中でエヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語を含む言語地域は次のように分類されている。

### 1.3 ヤクート語、エヴェンキ語及びブリヤート語の各言語間の借用について

では実際に借用はどのように見られるのだろうか。ここでは主に先行研究をもとに、ヤクートの側から借用の状況を簡単に見ておく。次はヤクート語とモンゴル諸語における語彙の借用について述べたものである：

ヤクート語にみられる借用語の中で、もっとも量の多いのはモンゴル語である。ヤクート語語彙の約 25 パーセントがモンゴル語であると言ってよい。この借用は、12～13 世紀頃から数世紀の間に行なわれた。直接に接触したのは、モンゴル語のうちでも、ブリヤート方言であったと言われていいる。だが、借用形式の多くは、現在みられるブリヤート語よりは、むしろモンゴル文語やハルハ・モンゴル語、あるいはカルムイク語に近い形式を示している。これは借用の行なわれた頃のブリヤート語が、現在のものほど発達していなかったためと推定される。(庄垣内 1992: 548)

続いて、ヤクート語とエヴェンキ語との関係を述べた部分を引用する：

借用語は、モンゴル語のほかに、ツングース語、とりわけその中のエベンキ(エウエンキー)語からのものもかなり多い。…(中略)…ツングース語からは、トナカイ飼養のほか、衣食住、あるいは動植物に関する内容の語彙が入っている。また、ヤクート語からツングース語へ貸与された語彙も多い。若干であるが、モンゴル語やツングース語からの接尾辞の借用もみられる。(庄垣内 1992: 548)

語彙レベルでは以上見たように、ヤクートとモンゴル、エヴェンキの間で借用が為されてきたことが分かっており、またその研究も比較的多く為されてきたと言えよう(Kałużyński (1962)、Романова et al. (1975) など)<sup>7</sup>。

一方で、文法的な構造のレベルでの借用についても指摘されている。例を挙げると、エヴェンキ語からのヤクート語への命令法における 2 つの時制の体系

---

中央シベリア言語地域(二つの小地域に分かれる)：

バイカル小地域(エヴェンキ族、ブリヤート族)

レナ小地域(エヴェンキ族、ヤクート族)

ヤクート語とブリヤート語が接触する機会にはほとんどないと言ってよいであろうが、エヴェンキ語は現代でもヤクート語及びブリヤート語と接触を持っていると言える。

<sup>7</sup> また、エヴェンキとモンゴルの間においては、「モンゴル語からの借用語は、エウエンキー語、とくにその南部の方言やソロン語にも多く入っている」(池上 1989: 139) という指摘もある(他に、Василевич (1958) にも挙げられている)。

的な借用<sup>8</sup>などが挙げられるだろう。

このように言語接触が認められる状況の下、次章から具体的に問題点を見ていくこととする。

## 2 問題点

### 2.1 動詞の活用諸形

本論文で取り上げるテーマは、動詞の人称接辞である。

そこでまず動詞の活用について定義をしておく。アルタイ諸語に属する言語は、一般に動詞はおおよそ次の3つの活用形を持つと考える。

定動詞形：文の述語となり、文を終止する機能を持つ形。基本的に文末に位置し、(動詞文では) 1文に1つある。いわゆる命令形もここに含める。

副動詞形：副詞と同様に他の動詞、形容詞、副詞などを修飾する形。あるものは等位節の述語となって文を中止し、他のものは従属節の述語となって主文にかかる。また、副動詞類の一部は他の動詞や補助動詞と結合し、複合動詞の形成や、動作の様々なアスペクトや様態を表す。

形動詞形：名詞類を修飾する形容詞的な意味と働きを持ち、また、名詞的な意味と働きをも持つ形。後置詞的な語を後続し、或いは格形式をとることで従属節・副詞節をつくることも出来る。

### 2.2 副動詞形につく人称接辞

まず次の2つの例文を見てほしい。

(1) はエヴェンキ語から、(2)はヤクート語からの例である。

- (1) *ənin-mi, bi diginjələkə anjanīčə bi-ḡasi-y, məkčərə-rən.*  
 母-1sg.poss 1sg 14 年に be-conv.NGASI-1sg 死ぬ-nfut.3sg  
 “私の母は、私が14歳の時に、亡くなった。” (Kl:206)

- (2) *Min miine-ye tübeh-em-min, anar ilii-bitten map-pīt-īm.*  
 1sg 地雷-dat 出くわす-conv.AN-1sg そして 手-1sg.poss.abl 失う-pst-1sg.  
 “私は地雷に出くわして手を失った。” (Kr:17)

<sup>8</sup> この問題は藤代 (1989) に詳しいので参照されたい。

この 2 つの例文は共に副動詞を述語に持つ従文を含む複文である（副動詞語尾の部分は下線無しの太字斜体で示している）。そしてその副動詞語尾の後に付いている接辞は従文の主語に対応する（一致を示す）人称接辞である（人称接辞の部分は下線付きの太字斜体で示している）。

一般にヤクート語以外のチュルク諸語では副動詞形は人称接辞を伴うことはない（人称接辞のみならず通常他のいかなる接辞をも伴わない）。その為ヤクート語において人称接辞の付いた副動詞形は際立った特徴であり、チュルク的でないといえる（Харитонов 1982: 240）。また、ヤクート語の人称接辞を取る副動詞形についてその起源を検討した先行研究は見当たらない。さらに、他の言語との関係では、長く言語接触を持ってきたエヴェンキ語には副動詞形に接辞を取ることが知られていた為に、この文法的特徴はエヴェンキ語の影響だろうと言及されてきた（Убрятова 1976: 45, Коркина 1985: 17）。

ここでブリヤート語からの例(3)を見てみよう。

- (3) *tende* *xüre-je* *ošo-tor-nai*  
 そこ 到着する-conv.JA 行く-conv.TAR-1pl.poss  
*dain baldaan duuha-xa yohotoi.* (Sk:116)  
 戦争 終わる-part 違いない  
 “我々がそこへ着くまでには戦争は終わっているに違いない。”

この例文(3)も副動詞を述語に持つ従文を含む複文である。ここでは従文内に主語にあたる名詞句がない。しかし、主語との一致を示す 1 人称複数の人称接辞が副動詞形に付いている為、主語は 1 人称複数であると分かる。このように、ブリヤート語においても人称接辞を取る副動詞が存在するのである。

この事実をもって、ヤクート語に見られる人称接辞を伴う副動詞について、それが果たしてエヴェンキ語からだけの影響によるのか、ブリヤート語からの影響はなかったのかなど、検討の余地がまだある。

## 2.3 形動詞形と人称接辞

一方で、次に挙げる例は動詞の形動詞形が現れている句である。ここでも動詞の主語が、その主語と一致する人称接辞で標示されている。(4)はエヴェンキ語、(5)はヤクート語、そして(6)はブリヤート語からの例である。参考に(7)にトルコ語の例も挙げる。(形動詞語尾は太字斜体、人称接辞は太字斜体に下線を付けて示している。)

- (4) bəyə vā-na-n homōti (N: (170)b.)  
 人 殺す-part.NA-3sg.poss 熊  
 “人が殺した熊”
- (5) Uybaan suruy-but surug-a (SM:427)  
 人名 書く-part.BIT 手紙-3sg.poss  
 “イワンが書いた手紙”
- (6) Aldar-ai bar'-aad bai-han tülx'üür-ün' (Sk:126)  
 人名-gen 持つ-conv.AAD be-part.HAN 鍵-3sg.poss  
 “アルダルが持っていた鍵”
- (7) Ali-'nin kavga et-tiğ-i arkadaş (勝田 : 142)  
 人名-gen けんか する-part-3sg.poss 友人  
 “アリがけんかした友人”

これら例文の構造を簡略化して書くと次のようになる。(下線を引いた部分は動詞の主語である。また、人称接辞は単純に-3sg で示した。)

- (4)' [[ 人が 殺した-3sg] 熊 ] (エヴェンキ語)  
 (5)' [[ イワンが 書いた] 手紙-3sg ] (ヤクート語)  
 (6)' [[ アルダルが 持っていた] 鍵-3sg ] (ブリヤート語)  
 (7)' [[ アリが けんかした-3sg] 友人 ] (トルコ語)

注目すべきところは人称接辞の現れている位置である。エヴェンキ語では形動詞形のすぐ後ろである(トルコ語と同じ)。それに対して、ヤクート語とブリヤート語では形動詞形によって修飾されている名詞に付いている<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> ここで被修飾名詞に付いている人称接辞が表すものが、行為者(修飾する動詞の主語)であり所有者ではないということは、例文を引用した文献による判断である。また、この点を例文とともに詳細に記述した論文等は、筆者の見る範囲では見付けられなかった。これを確認する為に、ヤクーツク在住の知人(父がブリヤート語母語話者、母がヤクート語母語話者で共にロシア語も話すバイリンガルである。知人本人はロシア語のみ話す。筆者との会話はほとんど英語による)を通し、母語話者に電話にて次の質問をした。電話ということもあり詳細に聞くことはできなかったが、参考までに挙げておく。

**質問**：次の2つの phrase はヤクート語、ブリヤート語で何と言いますか(英語とロシア語共に伝える)。

1. a dog which I killed (собака, которую я убил) “私が殺した犬”



2.2 で見た副動詞形における人称接辞の場合と異なり、形動詞形における人称接辞ではエヴェンキ語がヤクート語やブリヤート語とは異なる振る舞いをしていいる。勿論、副動詞形と形動詞形で動詞の形式は異なるが、動詞の主語に一致して標示される人称接辞という面からは類似した性質を持つのにも関わらず、その現れ方は異なっている。形動詞形における人称接辞については、ヤクート語はエヴェンキ語よりもむしろブリヤート語と類似している点が注目される。

以下、本論文では、エヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語の動詞の人称接辞について考察する。主に副動詞形と形動詞形において現れる人称接辞を取り上げる。類型論的な比較を通して、それぞれの形態的構造が発生的なものなのか、それとも借用によるのかについて議論し、それをもとに異なる形式をとるに至った、或いは借用するに至った原因について考察する。

エヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語の比較の上で、それぞれが属するツングース諸語、チュルク諸語、モンゴル諸語が一般的にどういった特徴を持つかを見ることは、類型論的比較をする上では欠かせない。そこで本論文では主にトルコ語、モンゴル語（ハルハ方言を指す。以後特に明記しない限り、“モンゴル語”とはハルハ方言を指す）を比較の対象に挙げ、必要に応じて他の言語にも触れていく。

2. your dog which I killed (ваша собака, которую я убил) “私が殺したあなたの犬”

答え:

ヤクート語

1. min ölä**r-büt** it-**im**  
1sg 殺す-part 犬-1sg.poss
2. min ölä**r-büt** it-**im** ehie**ne**  
1sg 殺す-part 犬-1sg.poss 2pl.物主所有形

ブリヤート語

1. minii ala-**han** noxoi  
1sg.gen 殺す-part 犬
2. minii ala-**han** tanai noxoi  
1sg.gen 殺す-part 2pl.gen 犬

ヤクート語でははっきりと確認できたと言えるであろう。しかし、ブリヤート語においては任意に被修飾名詞に人称接辞が付く。そのため、上の質問では接辞が付かない例が得られた。念のため次に、文献に挙げられている例から、人称接辞が 1 人称である同じ環境の例を挙げておく。

- (i) xara-**gša** basaga-**m** (Sk:114)

見る-part.GŠA 少女-1sg.poss

“私が見ている少女”

ブリヤート語では人称接辞が付く例、付かない例共に見られるが、人称接辞が形動詞形に付く例（エヴェンキ語やトルコ語のように）は見られない。

### 3 副動詞形

#### 3.1 副動詞形について

##### 3.1.1 定義

動詞の活用の定義でも述べたように (2.1)、定動詞形と副動詞形は、文を終止できるかどうかという点で機能的に大きく異なる。そして、通常、形態においても明確に区別される。定動詞形と副動詞形が機能及び形態において区別されることから文の名称について次のように定義する。**複文**は主文と従文から成る文を指す。このうち**主文**とは定動詞形を含む文（基本的に動詞文において1文には1つの定動詞形があると考え）を、そして**従文**とは主文とは別に副動詞形を述語として持つ文を指す。また、主文の主語と従文の主語が同一のものを指している複文を**同主語複文**、そして異なるものを指している複文を**異主語複文**と呼ぶことにする。

##### 3.1.2 副動詞形の現れ方について

従文に関して、並列節 *coordinate clause* と従属節 *subordinate clause* の区別が為される場合がある。主文との関係で並列性のある節（従文）を並列節とし、従属性のある節（従文）を従属節と呼ぶわけである。しかし、この基準ははっきりと二分できる基準ではない<sup>10</sup>。本論文では、副動詞を述語に持つ従文が主文に対して並列性が強いのか、それとも従属性が強いのかによって区別はしない。また、定動詞形の文を接続詞等で連結した文は副動詞形を含まないため、本論文で扱う従文ではないと考える。

##### 3.1.3 主語について

本論文で扱う動詞人称接辞は文の主語と一致する。例えば次の例(8)はエヴェンキ語からである：

(8) Taduk atirkān dagama-ra-n mundulā. (Kl:100)

そして 老婆 近づく -nfut-3sg 1pl.inc.all

“そして老婆は私たちの方に近付いていった。”

(8)で、動詞 *dagama-* “近づく” の表す動作の行為者 (agent) である *atirkān* “老婆” が主語であり、人称・数で一致する人称接辞 *-n* が動詞 (定動詞形) に付いている。

<sup>10</sup> Haspelmath (1995: 5) にもこの点が触れられている。

また、従文内で名詞類（名詞あるいは代名詞など）によって主語が表示されることがある（以下このような名詞類を主語名詞と呼ぶ）。従文内の主語名詞に関しては、次の2点について考えなければならない。

一、主語名詞はいかなる格で標示されるのか

二、主語名詞と、それに一致する人称接辞は相補的な関係にあるのか

まず一について。モンゴル語においては水野（1995）が指摘しているように、従文内で主格・対格・属格で現れうる主語名詞の格は副動詞形の種類によって単純に決まるものではなく、様々な要因（例えば「句どうしの結びつきやすさ」、「格衝突の回避」など5点挙げている）によって決まるものである。ブリヤート語においては同様に主格と属格で揺れがある。また、チュルク諸語やツングース諸語では通常主格で現れ、大きな揺れはないと考えられる<sup>11</sup>。

次に二について。副動詞形に人称接辞がつく時は主語名詞は表示されないのが普通である。これは従文に限ったことではなく単文（或いは主文）においても主語名詞の省略は一般に見られる。しかし、ブリヤート語では主語名詞と人称接辞が共に現れる例が稀にはあるが存在する<sup>12</sup>。

以上より、従文内に主語名詞が現れるか否か、そして現れるとすればいかなる格であるかということは、動詞に付く人称接辞に関する考察とは直接的に関与しないと考えられる。従って副動詞形を類型論的に見る場合、主語名詞については特に問題としないこととする。

次節より具体的に各言語における状況を類型論的に見ていく。その基準として次の2つを提案する：

- ①副動詞語尾が人称接辞をとらないか、任意的にとるか、義務的にとるか
- ②副動詞語尾が同主語複文のみに現れるか、異主語複文のみ現れるか、或いは両方で現れることが出来るか<sup>13</sup>

これは、副動詞形が人称接辞を取るか否かという点を中心に類型論的比較をすることを目的に想定した基準である。

### 3.2 各言語における状況

ここでエヴェンキ語、ヤクート語、ブリヤート語の順に、分類を具体的な例文と共に示していく<sup>14</sup>。例文は、副動詞語尾を太字にし、従文に下線を引き、副

<sup>11</sup> この点、4章で見る形動詞形の場合、形動詞節内で現れる主語名詞の格はほぼ一定しているようである。

<sup>12</sup> V. P. Nedjalkov (1995: 123)

<sup>13</sup> この視点は V. P. Nedjalkov (1995) でも挙げられている。

<sup>14</sup> 分類に際し記号 A, B, C, C', D を挿入したが、これは後で表 1 にまとめた際に用いた記号

動詞形に人称接辞が付いている場合はそれを斜体で示している。紙幅の都合上、例は一部を挙げるにとどめる。

### エヴェンキ語<sup>15</sup>

まず、エヴェンキ語について、Колесникова (1966)、I. Nedjalkov (1997)<sup>16</sup>で挙げられている副動詞形を上挙げた 2 つの基準から分類すると次のように 3 つに分けられる<sup>17</sup>。

#### ①人称接辞を取らない副動詞語尾

－ 1 : 同主語複文のみ可能＝A ; -na<sup>3</sup>, -mnak<sup>3</sup>, -kaim<sup>3</sup>, -mi

#### ②人称接辞を必須とする副動詞語尾

－ 1 : 同主語複文・異主語複文が可能＝C ; -da<sup>3</sup>/vuna<sup>3</sup>, -knan<sup>3</sup>, -dala<sup>3</sup>, -ktava<sup>3</sup>, -ŋasi<sup>3</sup>, -čala<sup>3</sup>

－ 2 : 異主語複文のみが可能＝D ; -rak<sup>3</sup>, -janma<sup>3</sup>

#### ①－1 の例

- (9) Bi nyurma-ja-ŋna-m mōti-va darkin-dū,  
 1sg しのび寄る-impf-hab-nfut.1sg オオシカ-accd 凍った地面-dat  
 kiglə-l-vī əxsəjə-nə. (Kl:203)  
 スキー-pl-refl.sg 肩に乗せて運ぶ-conv.NA

“私はスキーを肩に乗せて氷の上をオオシカに近付いていった。”

例文(9)では、主文、従文の主語は共に“私”である。副動詞形 -na<sup>3</sup>は異主語複文として使用すると非文になると予想される。従って -na<sup>3</sup>は①－1 のタイプ

と一致する。表 1 と見比べることが容易になるように加えたものである。

<sup>15</sup> エヴェンキ語の主な副動詞語尾（代表形）とその意味を挙げる。

-mi(MI)因果関係「～するので」；-na<sup>3</sup>(NA)接近「～して」(-jana<sup>3</sup>という形を独立して立てるものもある)；-mnak<sup>3</sup>(MNAK)同時「～し」(-mnen という形もあるが意味は変りなく異形態と見る)；-kaim<sup>3</sup>(KAIM)分離「～してから」(-kanim<sup>3</sup>という異形態もある)；-da<sup>3</sup>/vuna<sup>3</sup>(DA/VUNA)目的「～するために」；-knan<sup>3</sup>(後置)(KNAN)結果「～するまで」；-dala<sup>3</sup>(後置)(DALA)先行「～する前に」；-janma<sup>3</sup>(前置)(JANMA)限定「～するまでには」；-rak<sup>3</sup>(RAK)因果関係Ⅱ；-ktava<sup>3</sup>(KTAVA)接近Ⅱ；-ŋasi<sup>3</sup>(NGASI)同時Ⅱ；-čala<sup>3</sup>(ČALA)分離Ⅱ

<sup>16</sup> 本文中にあるように 3 つに分類されるという結果は I. Nedjalkov (1997: 271) と同じである。しかし、I. Nedjalkov は同主語複文、異主語複文またはそのどちらも作ることが出来るという 3 点を並列に見て一面的に捉えている。これに対して、本論文で取っている基準は既述の 2 点 (①②) から二面的に見ているという点で異なっていると言える。

<sup>17</sup> 語尾の右上にある数字は、母音調和、或いは子音調和による異形態の数を示す。

エヴェンキ語：a<sup>3</sup>=a-ə-o、ブリヤート語（モンゴル語）：a<sup>3</sup>=a-e-o, a<sup>4</sup>=a-e-o-ö, aa<sup>4</sup>=aa-ee-oo-öö, uu<sup>2</sup>=uu-üü、ヤクート語（トルコ語）：a<sup>4</sup>=a-e-o-ö, i<sup>4</sup>(i<sup>4</sup>)=i-i-u-ü, 子音調和の場合例えば ba<sup>12</sup>=b-p-m×a-e-o-öということを表す。

になると考える。ここで見られるように、エヴェンキ語では従文は主文の後に  
来ることもでき、また、語順は比較的自由である。

②-1 (同主語複文) の例

(10) Čipkān-ə baka-dā-v̄ dili girku-ja-m. (Kl:209)

クロテン-accin 見つける-conv.DA-refl.sg タイガ 歩く-prs-1sg

“クロテンを見つめる為に、私はタイガを歩いて行く。”

②-1 (異主語複文) の例

(11) Bi xutə-l-vi suruvu-m əntil-dulə-v nuṇartin ānṇet-tā-tin. (Kl :209)

1sg 子供-pl-refl.sg 遣る-nfut.1sg 両親-all-refl.sg 3pl 泊まる-conv.DA-3pl.poss

“私は子供たちが泊まるように両親のところへ彼らを行かせた。”

例文(10)(11)は、同じ副動詞語尾 -da<sup>3</sup> による複文である。(10)では主文、従文  
の主語は共に“私”であり、接辞は再帰所有接辞が現れている。同主語複文の  
場合は所有人称接辞ではなく再帰人称接辞が現れる。一方(11)は、主文の主語が  
“私”、従文の主語が“子供たち”である異主語複文である。ここでは、副動詞  
語尾 -da<sup>3</sup> は人称接辞を必須に取り、同主語複文および異主語複文で現れる②-1  
のタイプに属すると考える。

②-2 の例

(12) Libgə-l-lək-in, učak xukti-jərə-n, sinilgən

雪降る-ingr-conv.RAK-3sg.poss 乗用トナカイ 走る-prs-3sg 雪

tiṇəptun-mə-n ə-jəli-n libgə-l-lə. (Kl:207)

帯-accd-3sg.poss neg-conv-3sg.poss (雪が)降る-ingr-conv.RA

“雪が降り出したが、雪が腹帯に達しないうちはトナカイは走っている。”

例文(12)では従文が2つ出てきている(一つは下線、もう一つは二重下線で示  
してある)。主文の主語が“トナカイ”であるのに対して2つの従文の主語は“雪”  
であると考えられる。下線部に見える副動詞語尾 -rak は人称接辞を必ず取り異  
主語複文にのみ現れる。従って②-2のタイプに属する<sup>18</sup>。

<sup>18</sup> また、二重下線部に見える副動詞語尾 -jəl は、意味は「～(しない) うち」いう否定  
の状態の限界を表し、否定動詞 ə-とのみ共起するという特徴があるため、上の分類表には  
含めていない。タイプとしては、人称接辞を取り異主語複文にのみ現れるため、②-2に属  
すと考えられる。

# ヤクート語<sup>19</sup>

Коркина (1985)、Харитонов (1982)、Убрятова (1976)、Stachowski and Menz (1998) での副動詞形に関する記述からは、ヤクート語の全ての副動詞形が一つのタイプに属することが読みとれる。

① 人称接辞を任意に取ることが出来る－1：同主語複文・異主語複文が共に可能＝C'；  
-an<sup>4</sup>, -a<sup>4</sup>/i<sup>4</sup> (-i)mīna<sup>4</sup> 前2つの否定形), -bakka<sup>12</sup>, -aari<sup>4</sup> (-īmaari<sup>4</sup> 否定形), -aat<sup>4</sup>, -bičča<sup>12</sup>

## ①－1 (同主語複文) の例

- (13) Min miine-ye tübeh-em-min, anar ilii-bitten map-pīt-īm.  
1sg 地雷-dat 出くわす-conv.AN-1sg そして 手-1sg.poss.abl 失う-pst-1sg.  
“私は地雷に出くわして手を失った。” (Kr:17) =(4)

## ①－1 (異主語複文) の例

- (14) Eterbeh-im ulluŋ-a test-en(-φ).  
トナカイ皮の長靴-1sg.poss 靴底-3sg.poss 裂ける-conv.AN(-3sg)  
toyon erbey-im kītar-a silj-ar. (Харитонов 1982: 243)  
親指-1sg.poss 赤くなる-conv.A 行く-prs.3sg  
“私の長靴の靴底が裂けて、親指が赤くなっている。”

(13)及び(14)は共に副動詞語尾 -an<sup>4</sup> が使われている例である。(13)では主文、従文ともに主語は1人称単数であり、(14)では主文の主語が“靴底”、そして従文の主語が“親指”である<sup>20</sup>。

# ブリヤート語<sup>21</sup>

<sup>19</sup> ヤクート語の主な副動詞語尾(代表形)とその意味を挙げる。

-an<sup>4</sup> (N)連合「～してそして」；-a<sup>4</sup>/i<sup>4</sup> (A)並列「～して、しながら」(-i)mīna<sup>4</sup>：前2つの否定形：～しないで)；-bakka<sup>12</sup> (BAKKA)否定「～せずに」；-aari<sup>4</sup> (AARI)目的「～する為に」；(-īmaari<sup>4</sup> 目的の否定形：～しない為に)；-aat<sup>4</sup> (AAT)即刻「～するや否や」；-bičča<sup>12</sup> (BIČČA)理由「～なので」

<sup>20</sup> (14)では副動詞語尾の後に人称接辞がないように見える。3人称単数の接辞は-φであり、ここでは人称接辞があるのかそれとも無いのか判断はつかない。

<sup>21</sup> ブリヤート語の主な副動詞語尾(代表形)とその意味を挙げる。

-n(N)連合「～し」；-ja<sup>3</sup> (JA)並列「～して」；-aad<sup>4</sup> (AAD)分離「～してから」；-bal<sup>3</sup> (BAL)条件「～すれば」；-tar<sup>3</sup> (TAR)限界「～するまで」；-msaar<sup>4</sup> (MSAAR)即刻「～するや否や」；-xlaar<sup>4</sup> (XLAAR)随伴「～するとすぐ」；-haar<sup>4</sup> (HAAR)継続「～する間ずっと」；-ngaa<sup>4</sup> (NGAA)付帯「～するついでに」；-nxaar<sup>4</sup> (NXAAR)代替「～する替りに」；-xayaa<sup>4</sup> (XAYAA)目的「～する為に」；-xaar<sup>4</sup> (XAAR)完了限界「～したまで」

ブリヤート語について、Poppe (1960)、Bosson (1962)、Skribnik (2003) で挙げられている副動詞形を分類すると次のように3つに分類される。

①人称接辞を取らない副動詞語尾

－1：同主語複文・異主語複文が共に可能＝B；-ja<sup>3</sup>, -aad<sup>4</sup>

－2：同主語複文のみ可能<sup>22</sup>＝A；-xaar<sup>4</sup>, -ngxaar<sup>4</sup>

②人称接辞を任意に取ることが出来る副動詞語尾

－1：同主語複文・異主語複文が共に可能＝C'；-bal<sup>3</sup>, -tar<sup>3</sup>, -msaar<sup>4</sup>, -xlaar<sup>4</sup>, -haar<sup>4</sup>

①－1（異主語複文）の例

(15) gern-ai düre-š-ööd, gansal ene šubuunai ger ülöö geeše. (Sk:116)

家-gen 燃える-perf-conv.AAD 唯一 この 鳥の 家 残る pcle

“家が焼けてこの養鶏場だけが残った。”

①－1（同主語複文）の例

(16) Sai-gaa uu-gaad, hurguuli-d-aa ošo-bo(-φ). (Poppe 1960: 71)

茶-refl 飲む-conv.AAD 学校-dat-refl 行く-pst.3sg

“彼は自分の茶を飲んで学校へ行った。”

(15)及び(16)はともに副動詞語尾 -aad<sup>4</sup> が現れている複文である。(15)では主文の主語は“家”であるのに対して、従文の主語は“養鶏場”であり、異主語複文である。そして(16)では主文、従文ともに主語は同じである。

①－2 の例

(17) Ner-ee xuxara-ngxaar yah-aa xuxara. (Sk:117)

名前-refl 壊す-conv.NGXAAR 骨-refl 壊す(-imp.2sg)

“名を壊すより骨を壊せ (諺)”

(17)は副動詞語尾 -ngxaar<sup>4</sup> が現れている複文である。主語については特定されていないが、同一のものを指している。異主語複文で現れる例が見られないことより、①－2に属すると考えられる。

<sup>22</sup> 他に -xayaa<sup>4</sup>, -ngaa<sup>4</sup> が分類されると考えられる可能性があるが、この副動詞語尾は既に再帰接辞が含まれていると見ることもでき、本文では除外しておく。

②-1 (異主語複文) の例

- (18) tende xüre-je                      ošo-tor-nai  
 そこ 到着する-conv.JA 行く-conv.TAR-1pl.poss  
             dain baldaan    duuha-xa              yohotoi. (Sk:116) =(3)  
             戦争              終わる-part.XA    違いない  
 “我々がそこへ着くまでには戦争は終わっているに違いない。”

②-1 (同主語複文) の例

- (19) xügšer-ter-öö                      uxaa or-oo-güi(-φ). (Pope 1960: 71)  
 老いる-conv.TAR-refl    知恵 入る-part.impf-neg.3sg  
 “彼は老いてまで知恵がなかった。”

(18)及び(19)はともに副動詞語尾 -tar<sup>3</sup> が現れている文である。(18)は主文の主語が“戦争”で、従文の主語は1人称複数となっている異主語複文であり、(19)は主文、従文ともに主語が同じであり、同主語複文である。

次にモンゴル語とトルコ語について見てみよう。例文は挙げずに副動詞語尾の分類を挙げるにとどめる。

モンゴル語<sup>23</sup>

モンゴル語において、小沢(1963)で挙げられている副動詞語尾を分類すると、次のようにおおよそ2つに分けられる<sup>24</sup>。

- ①(原則) 人称接辞を取らない副動詞語尾-1: 同主語複文・異主語複文が共に可能=B;  
 -jč, -(g)aad<sup>4</sup>~iad<sup>2</sup>, -saar<sup>4</sup>, -vč, -mag<sup>4</sup>, -xaar<sup>4</sup>, -val/bal<sup>4</sup>  
 (②) 3 人称所有接辞或いは再帰所有接辞を任意に伴う副動詞語尾  
 -1: 同主語複文・異主語複文が共に可能=C'; -tal<sup>4</sup>, -nguut<sup>2</sup>)

<sup>23</sup> モンゴル語の主な副動詞語尾とその意味を挙げる。

-jč「並列」, -(g)aad<sup>4</sup>~iad<sup>2</sup>「分離」, -saar<sup>4</sup>「継続」, -vč「譲歩」, -mag<sup>4</sup>「即刻」, -xaar<sup>4</sup>「目的」, -val/bal<sup>4</sup>「条件」, -tal<sup>4</sup>「限界」, -nguut<sup>2</sup>「付帯」

また、他 -ngaa<sup>4</sup> という副動詞語尾もあるが、註22と同様に既に再帰接辞があるとみることあり、ここでは除外しておく。さらに、-n という副動詞語尾もあるが、従文を構成する機能がほとんど見られないためここでは扱わなかった。

<sup>24</sup> ②-1 というタイプは人称接辞が3人称と再帰所有接辞に限られる。つまり、1人称または2人称の人称接辞が現れる例がない。この意味において不完全と見ることができ、括弧を付けて示した。例文は挙げない。



### トルコ語<sup>25</sup>

勝田（2001）ではトルコ語の副動詞について同主語複文あるいは異主語複文のどちらに現れるかという点から既に分類が為されている。そこへ人称接辞についての基準を加えると、次のように分類される。

#### ①人称接辞を取らない副動詞語尾

- － 1：同主語複文のみ可能＝A； -(y)ip<sup>4</sup>, -(y)e<sup>2</sup>-(y)e<sup>2</sup>, -(y)erek<sup>2</sup>, -mek<sup>2</sup>tense, -ce<sup>2</sup>sine 等
- － 2：同主語複文・異主語複文が可能＝B； -(y)ince<sup>4</sup>, -meden<sup>2</sup>, -(y)e<sup>2</sup>li, -(y)ken, -dik<sup>4</sup>çe 等

### 3.3 小括

以上、各言語について副動詞を 2 つの基準（下に再掲する）に基づいて分類することを試みた。

- ①副動詞語尾が人称接辞をとらないか、任意的にとるか、義務的にとるか
- ②副動詞語尾が同主語複文のみに現れるか、異主語複文のみ現れるか、或いは両方で現れることが出来るか

それぞれの基準ごとに 3 つのタイプがあり、それによって組合せを考えると、理論上、表 1 のように 9 つのタイプに分かれる。ところが、実際に確認されるのタイプはその内の 5 つである<sup>26</sup>（存在しないタイプのセルは斜線で消してある）。

表 1 副動詞形のタイプ表

副動詞語尾に			主文と従文の主語に関して		
			同主語複文のみ	どちらも可	異主語複文のみ
人 称 接 辞	取らない		A	B	
	取ることが出来る	必須		C	D
		任意		C'	

表 1 に見るタイプの分布は、Haspelmath（1995）で挙げられている世界の言語の *converb* における一般的傾向と一致している。参考にそこで挙げられている表

<sup>25</sup> トルコ語の主な副動詞語尾とその意味を挙げる。

-(y)ip<sup>4</sup>「分離」、-(y)e<sup>2</sup>-(y)e<sup>2</sup>「並列 1」、-(y)erek<sup>2</sup>「並列 2」、-mek<sup>2</sup>tense「代替」、-ce<sup>2</sup>sine「様態」、-(y)ince<sup>4</sup>「同時」、-meden<sup>2</sup>「除外」、-(y)e<sup>2</sup>li「起点」、-(y)ken「継続」、-dik<sup>4</sup>çe「程度」

<sup>26</sup> ここで C と C' というタイプについて説明を加えておく。本論文で見たいのは副動詞に人称接辞が付くという現象である。そのため、ここでは、副動詞が人称接辞を伴うという特徴でまずまとめ、その下位分類として人称接辞が義務的なのか、任意的なのかという点で分類することにする。同じ記号 C を用いているのはそのためである。

を下に紹介する<sup>27</sup>。

表 2 Subject reference in converbs (Haspelmath 1995:10)<sup>28</sup>

	same-subject		varying-subject		different-subject	
implicit-subject converb	<i>typical</i>	(=A)	unusual	(=B)	unusual	
explicit-subject converb	unusual		unusual	(=C)	<i>typical</i>	(=D)
free-subject converb	unusual		<i>typical</i>	(=C')	unusual	

Haspelmath 自身は“subject”（主語）の表示について、その手段（人称接辞或いは主語名詞など）を特定していない。ここでは、implicit-subject とは人称接辞を取らないこと、explicit-subject とは人称接辞を義務的に取ること、そして free-subject とは人称接辞を任意的に取れることを指すと取ると、表 1 で示したタイプは各々表 2 のように当てはまると考えられる。表 2 を見ると、まず 3 つの typical とされるタイプに当てはまるタイプが存在していることが分かる（A, C, D のタイプ）。また一方で、unusual とされるタイプに属するタイプも存在していることも確認される（B, C のタイプ）。

次に 3.2 で見た言語について、表 1 で挙げた副動詞形に関する 5 つのタイプの分布を示すと、表 3 のようになる<sup>29</sup>。

表 3 を見て考察していこう。まず、ヤクート語の副動詞は全て C'タイプの一つのタイプに属している。また、長く接触をもってきたと考えられるブリヤート語、エヴェンキ語には C または C'タイプの副動詞が存在する。この 2 点に、チュルク諸語において人称接辞を取る副動詞はヤクート語以外には存在しないことを考え合わせると、C'タイプの副動詞をヤクート語が発生的に持っていたとは言い難く、接触によって借用したと考えるのが最も妥当であると言える。

次にモンゴル諸語についてである。表 3 を見る限り、C'タイプの副動詞がブリ

<sup>27</sup> この表に関して Haspelmath は次のように述べている：‘It should be noted, however, that so far the claims embodied in Table 4（注：本論文の表 2 と同じ）lack a firm empirical foundation and are mainly based on impressionistic observations. Thus Table 4 represents a hypothesis that needs to be tested on cross-linguistic data.’ (p. 11)

<sup>28</sup> 表 1 と対比が容易になるように縦軸の並びを一部変更し、また、=A, =B, =C, =C', =D を書き足している。この大文字アルファベットの記号はそれぞれ表 1 のタイプと同じものを指していることを示す。

<sup>29</sup> ここで、表 3 でモンゴル語の C'の欄に記した△という記号について説明しておく。モンゴル語において、人称接辞を任意に伴うことが出来る副動詞は、その副動詞形に付く人称接辞が 3 人称所有接辞が再帰所有接辞に限られている。全ての人称接辞が付くことが出来るわけではないことから完全に C'タイプに属するとは言えない為、○ではなく△で示している。

表3 副動詞形のタイプの分布

	A	B	C	C'	D
エヴェンキ語	○		○		○
ブリヤート語	○	○		○	
モンゴル語		○		△	
ヤクート語				○	
トルコ語	○	○			

ヤート語、モンゴル語に存在する。このことから、副動詞形に人称接辞が付くという特徴はモンゴル諸語にも存在したと考えることができそうである。しかし、モンゴル語の C'タイプの副動詞は、△で示したように全ての人称接辞が付くことはなく、弱い特徴と言わざるをえない。また、ブリヤート語では多くの副動詞が C'タイプに属するのに対し、モンゴル語ではほとんどの副動詞が B タイプに属し、C'タイプは少ない。ここで、モンゴル諸語について次の3つの仮説が考えられる。

- 仮説①モンゴル諸語は元来 B タイプの副動詞は無く、C'タイプの副動詞を持っていたが、何らかの理由により B タイプの副動詞を持つようになった  
 仮説②モンゴル諸語は元来 C'タイプの副動詞は無く、B タイプの副動詞を持っていたが、何らかの理由により C'タイプの副動詞を持つようになった  
 仮説③モンゴル諸語は元来 B 及び C'タイプの副動詞形を持っていたが、何らかの理由により、ブリヤート語では C'タイプに属する副動詞が多くなり、モンゴル語では C'タイプの副動詞が人称接辞を取らなくなっていった

筆者はこのうち仮説③が可能性としてより高いと考える。理由は以下のとおりである。

まず仮説①に対して。表2で示したように、B タイプの副動詞は *unusual* であり、いわば不安定であると言える。これに対して C'タイプの副動詞は *typical* であり、安定していると言える。言語変化の過程において、不安定な状態から安定した状態へ変化する方向の方が、その逆の方向へ向かう変化より一般的であると言えることができる。従って、C'タイプから B タイプへ変化したというより、B タイプから C'タイプへと変化したとする方がより可能性が高いと考えるのである。また、ブリヤート語においてなぜ少数の副動詞が B タイプへ変化したのか適当な原因が見当たらない。以上から、仮説①は適当でないと考えられる。

次に仮説②に対して。仮説①の排除の理由でも述べたように、B タイプから

Cタイプへの変化は妥当性がある。その意味では仮説②は仮説①よりは可能性があると見える。しかし、モンゴル語がなぜ一部の副動詞にのみ、また3人称所有接辞と再帰所有接辞に限って付くようになったのか、適当な原因が見当たらない。従って仮説②も適当ではないと考える。

以上より、折衷的な仮説③が最も可能性が高いと考えられる。ブリヤート語とモンゴル語でBとCタイプに属する副動詞には共通の形を持つ語尾が見られることから、モンゴル諸語は元来、B及びCに属する副動詞を持っていたと考えるのが妥当であろう。ブリヤート語においてCタイプに属する副動詞が多く見られる理由としては、ヤクート語が言語接触の結果、全ての副動詞がCタイプとなったと考えたことと平行的に捉え、エヴェンキ語の影響によるものと考えられるだろう<sup>30</sup>。一方で、モンゴル語でCタイプに属する副動詞に付くことができる人称接辞が限られている点については、次章の形動詞形の場合を見た後、第5章で考察する。

また、ここでヤクート語の言語接触はエヴェンキ語よりも前にモンゴル系言語（おそらくブリヤート語）との間にあったという史実から、モンゴル諸語の副動詞に人称接辞が付くという特徴がヤクート語に影響を与えた可能性もあることが指摘できる。

ここまでの結論としては、「副動詞形に人称接辞をつけるという特徴は、モンゴル諸語において発生的に、またモンゴル諸語との長い接触によってヤクート語においても持っていた可能性はあるが、双方ともエヴェンキ語との接触によってその特徴を借用する、或いは強められるに至った」とすることが出来る。

2.2で触れた先行研究 Убрятова (1976) には、ヤクート語における人称接辞を取る副動詞はエヴェンキ語の影響によるとする一方で、ヤクート語がその特徴を発生的に持っていた可能性があると指摘している。本論文ではヤクート語が人称接辞を取る副動詞を発生的に持っていたとは考えずに、エヴェンキ語より

<sup>30</sup> Janhunen (2003)に基づいて他のモンゴル諸語について概観しておく。保安語、東郷語、モンゴル語、シラ・ユグル語など、中国内の孤立的モンゴル諸語については、副動詞形に人称接辞が付く例は見当たらない。モゴール語はペルシア語の影響から副動詞形がほとんど使われず、多くは接続詞によって文が導かれる副詞節が用いられる。一方ダグル語には人称接辞が付くことができる副動詞形がいくつか存在する。また、オイラト語・カルムイク語にも少ないがいくつか存在する。これら人称接辞が付く副動詞形をもつ言語については、ダグル語はオロチョン語（オロチョン族は中国東北部に在住のツングース系言語を話す民族。エヴェンキ語ととても近い）と接触を持ってきていること、そしてオイラト語・カルムイク語を話す民族はかつてバイカル湖沿岸にいたオイラト族であるということから、ブリヤート語の場合と同じくツングース系言語との接触が考えられる言語である。一方、人称接辞が付く副動詞形を持たない言語は、ツングース系言語との接触が考えられない言語である。エヴェンキ語がブリヤート語へも影響を与えている可能性があることが、この点からも伺うことができるだろう。

も前にモンゴル諸語（ブリヤート語）と接触したことにより持つに至った可能性があるということを指摘したい。

## 4 形動詞形

### 4.1 関係節の用法

次に形動詞形と人称接辞について見ていく。2.3 でも既に触れたように、エヴェンキ語とヤクート語・ブリヤート語の間で異なった形式が現れる。つまり、形動詞形による関係節の主語と一致する人称接辞が、どこに付いて現れているかによって、次の表4のように大きく2つの類型に分けられる。

表4 形動詞形による関係節と語の結合

	I 類型	II 類型
<b>A</b> 関係節内の主語と形動詞形の間	人称接辞	——（↓人称の一致）
<b>B</b> 関係節と被修飾名詞の間	並置	人称接辞

一つはエヴェンキ語、トルコ語のように、人称接辞は主語と形動詞の間の一致によって標示され、関係節と被修飾名詞の間は並置<sup>31</sup>により表されるタイプ（I 類型）である。モンゴル語は、主語と動詞の間の（全ての動詞の活用において）一致は見られないため、この点でエヴェンキ語とトルコ語と異なるが、被修飾名詞に人称接辞がつくことはないという点でエヴェンキ語やトルコ語と同じタイプに属すると考えられる。そしてもう一つは、ヤクート語とブリヤート語に見られるタイプである。ここでは、主語と形動詞の間の人称の一致はなくなり、関係節と被修飾名詞の間でエザーフェ<sup>32</sup>が見られるタイプ（II 類型）である。この場合、エザーフェの接辞は関係節内の主語と人称・数において一致する。

下にそれぞれの類型ごとに具体例を見ていく。例文において、形動詞語尾は太字で、関係節は下線で、そして被修飾名詞は二重線で示している。また、関係節の主語を表す（或いは主語と一致する）接辞は斜体で示している。

<sup>31</sup> 修飾句と被修飾名詞を並べて示す形式を並置と呼ぶことにする。さらにエヴェンキ語の場合、修飾句と被修飾名詞ともに共通して複数・格などの接辞がつく（これを一致とも呼ぶ：cf. 動詞の主語と人称接辞の間の一致と同じ用語であり紛らわしい）。

<sup>32</sup> 被修飾名詞に人称接辞のような“被修飾 marker”が付くような形式を、以下エザーフェと呼ぶことにする。

## I 類型 人称接辞が形動詞形に付くタイプ

人称接辞が形動詞形に付くタイプにはエヴェンキ語、トルコ語が属する。

## エヴェンキ語

(20) Bu ičə-rə-v baka-na-l-va-tin oro-r-vo. (N: (117)b.)

1pl.exc 見る-nfut-1pl.exc 探す-part.NA-pl-accd-3pl.poss トナカイ-pl-accd

“私達は彼らが探しているトナカイを見ました。”

(20)においては、関係節 baka-na-…-tin “彼らが探している”の主語は形動詞形に付いている接辞の -tin (3 人称複数) から 3 人称複数であると分かり、その関係節は名詞 oro-r “トナカイ (複数)”を修飾していると見る事が出来る。

## トルコ語

(21) Bu sabah ev-in ön-ü-nde bul-duğ-um; anahtar;

この 朝 家-gen 前-poss-loc 見付ける-part-1sg.poss 鍵

dün akşam baba-m-in kaybet-tiğ-i ii anahtar ii i-di. (勝田: 143)

昨日 夕方 父-1sg.poss-gen 失くす-part-3sg.poss 鍵 be-pst

“今朝家の前で私が見つけた鍵は昨夜私の父が紛失した鍵だった。”

(21)においては、関係節と被修飾名詞のペアが2組含まれている(対応するペアを下付きのローマ数字で示している)。形動詞語尾はともに過去を表す -dik<sup>4</sup> が出ている。関係節内の主語と一致する接辞はともに形動詞形に付き、被修飾名詞である anahtar “鍵”には何も標示されていない。

チュルク諸語においては、トルコ語の他に、アゼルバイジャン語も同じタイプを示す (Johanson 1998: 63)。

上述したように、モンゴル語についても見ておく。関係節、被修飾名詞のいずれにも人称を表す接辞はない。

## モンゴル語

(22) üyeiinxee xün-ii ög-sön buu sum-aar

同年輩の 人-gen 与える-part 銃 弾-instr

buuda-ǰ üze-x yum biš üü ? (小沢: 36)

撃つ-conv.I 見る-part もの ない Q

“友達のくれた鉄砲と弾丸で撃って見ないかい?”

## II 類型 人称接辞が被修飾名詞に付くタイプ

次に人称接辞が被修飾名詞に付くタイプである。まず既に触れたようにここにはヤクート語とブリヤート語<sup>33</sup>が属する。

### ヤクート語

- (23) Min uu-bun      ĭraax-tan   da   ĭraax-tan   bah-a-bĭn   ee,  
 1sg 水-1sg.poss.acc   遠く-abl   pcle   遠く-abl   汲む-prs-1sg   pcle  
en   bukatĭn   bil-bet              sir-gitten.      (Ub: 156)  
 2sg   全く   知る-part.neg.AR   土地-2sg.poss.abl

“私はとっても遠くから水を運んで来るんだよ、お前の知らない所から。”

(23)においては、関係節 *en bukatĭn bil-bet* “お前の全く知らない” が被修飾名詞 *sir* “土地” にかかる。そして関係節内の主語 *en* (2 人称単数) に一致する接辞 *-gitten* が、被修飾名詞についている。

### ブリヤート語

- (24) Aldar-ai   bar'-aad              bai-han              tülx'üür-iin'   multar-ša-ba(- φ). (Sk:126)  
 人名-gen   持つ-conv.AAD   be-part.HAN   鍵-3sg.poss   脱落する-perf-pst.3sg  
 “アルダルが持っていた鍵が落ちた。”

ブリヤート語においては人称接辞が現れないこともあり、任意と言える。しかし人称接辞が現れる場合は必ず(24)のように被修飾名詞の後である。(24)では、関係節 *Aldar-ai bar'-aad bai-han* “アルダルが持っていた” が被修飾名詞 *tülx'üür* “鍵” にかかる。そして、関係節内の主語 *Aldar* に一致する 3 人称単数の人称接辞 *-iin'* が被修飾名詞に付いている。ヤクート語でも同様であったが、人称接辞は“鍵”と“アルダル”の間の所有関係を示すものではない。しかしこの例文の場合、意味の上から両者の間に所有関係があってもおかしくない為、明確ではない。次に挙げる例(25)は、被修飾名詞にかかる関係節の主語と、被修飾名詞の所有者が異なる場合である。この場合は被修飾名詞に付く人称接辞は関係節の主語との一致の方を優先するという説明が加えられている (Skribnik 2003: 126)。

<sup>33</sup> ブリヤート語では人称接辞が付くのは任意的である (注 9 参照)。本文では人称接辞が付く時の例を挙げる。

(25) Zun namda aba-han      samsa-šni      xaana-b.      (Sk:126)

夏      1sg.dat 掴む-part.HAN      シャツ-2sg.poss      どこ-Q  
 “あなたが昨夏私に持ってきてくれたシャツはどこ？”

つまりここでは、関係節の主語（持ってきた“あなた”）と、“シャツ”の所有者（明確に記述はされていないが、関係節で示される行為者とは異なるということから“あなた以外の誰か”であるという推測しか及ばない）が異なっていて、それぞれを標示する接辞が同じ場所（samsa の後）で競合してしまうのだが、前者が優先される。その結果、被修飾名詞には 2 人称単数の接辞が付いているのである。

アルタイ諸語の他の言語について見てみると、II 類型のタイプに属する言語が実は多い。例えばモンゴル諸語においてはオイラト語、チュルク諸語においてはクムク語、カザフ語、ウズベク語、新ウイグル語、トルクメン語を挙げることができる（チュルク諸語に関しては Johanson 1998: 62 を参照）。

## 4.2 小括

4.1 で見た 2 つの類型はどちらがより発生的であるかについては、はっきりと言える根拠はない。ただし、人称接辞に、主語と動詞の間の一致と、修飾語と被修飾語の間のエザーフェという 2 つの語の結合方法が融合している点で、他の語結合の場面では見られない為、ヤクート語やブリヤート語がより特殊であると見ることができる。従ってここまでの結論としては、「ヤクート語やブリヤート語における、形動詞形の関係節用法で現れる被修飾名詞につく人称接辞は、この地域においては類型論観点から見て特徴的である」と言える。

## 5 考察

副動詞形に人称接辞が付くという特徴が、エヴェンキ語からヤクート語やブリヤート語へ受け入れられる、或いはエヴェンキ語の影響で強められるに至った要因を、次の 2 点から考えてみたい：

- ① なぜモンゴル語がブリヤート語やエヴェンキ語のような完全な形でその特徴を持っていないのか（3.3 で保留していた問題点）
- ② なぜヤクート語やブリヤート語がその特徴を受け入れることが出来たのか

まず①についてであるが、第 3 章の小括でも述べたように、副動詞に人称節接辞が付くという特徴はモンゴル諸語においても発生的に持っていた可能性があることを示唆した。しかしモンゴル語においては、ブリヤート語に見られるように、全ての人称において可能というわけではなく、3 人称所有接辞と再帰所有



接辞においてのみ観察されるだけであった。

これは、まずモンゴル語では動詞において人称と数による区別をつけるという特徴（動詞の人称と数による一致現象）が全体的に弱まってきていることと同じ視点から見ることはできるのではないだろうか。モンゴル諸語では、漢語と強い接触を持つ地域において動詞で人称・数による活用を持たない言語が多くみられる。モンゴル語をはじめ、他にも内蒙古の諸方言、青海省や甘粛省で話されているシラ・ユグル語、保安語、東郷語などが挙げられる<sup>34</sup>。漢語との接触によって動詞の人称接辞が失われたと考えるのは、系統を異にするチュルク諸語においても同じで、青海省や甘粛省で話されているサリグ・ヨグル語、サラル語、ツングース諸語においては満州語（シベ語）も、動詞の人称接辞を失っているからである。動詞に人称語尾を持つ言語はこれらの言語よりも相対的に漢語の分布地域からは離れていると言えよう。

また別の要因として、モンゴル語において人称所有接辞が特殊な用法を持っていることが挙げられるだろう。次の(26)及び(27)はともに「私の本」という意味であるが、(26)は誰のでもない“私の”本であることが強調されるが、(27)は“本”であることが強調されるという説明が為されている（小沢 1963: 106）。

(26) minii nom	(27) nom min'
1sg.gen 本	本 1sg.poss

また、čín'(2sg.poss)と n'(3.poss)についても、本来の人称所有接辞とは全く別に「単に、主格表示の語尾として用いられることがある。又、čín'は「・・・したら」を意味する用法もある」（小沢 1963: 107）とあるように、意味を特化させている。そしてこのような方法は定着している。上で挙げた他のモンゴル諸語を見ると、保安語においては再帰所有接辞はなく、人称所有接辞も 3 人称のみであり（栗林 1992a）、シラ・ユグル語及びモンゴル語においては人称所有接辞が 3 人称しかない（栗林 1989, 1992b）。

以上のことから、①に対する答えとして、「モンゴル語において、人称接辞が定動詞形において消滅していった、或いは他の意味を担うようになった。このことにより、定動詞形の場合と同様にもはや副動詞形に人称接辞を付ける必要がなくなった、或いは取り入れる手段がなくなった為」という理由を考えることが出来るだろう。

次に②についてであるが、この問題を考えるために、まずは第 4 章で見た形

<sup>34</sup> またモンゴル語では人称・数とは異なる 2 つの陳述様式の体系を持つ。

動詞形について触れておきたい。

形動詞形に見られる人称接辞の振る舞いについては、表 4 でまとめたように大きく 2 つの類型に分けられ、そのうちブリヤート語とヤクート語において特殊と見られる特徴があるということが分かった。人称接辞が修飾する側の関係節に付かずに、被修飾名詞に付くのである。

一般に、修飾方法において並置とエザーフェの 2 つを比べた時、並置よりもエザーフェの方が、人称接辞で標示するという点において、語と語の関係をよりはっきりと示していると言えることが出来る。修飾方法として主に並置とエザーフェの 2 つの手段を持つヤクート語とブリヤート語において<sup>35</sup>、関係節に人称接辞を付けて被修飾名詞と並置するトルコ語のような構造が理論的には可能であったにもかかわらず、エザーフェの手段を取っていることは、重要である。

ヤクート語においては、属格が消失したことも影響して、エザーフェによる語の結合は所有関係を示す修飾以外に、名詞による名詞修飾でもたいへんよく見られる<sup>36</sup>。また、ブリヤート語において、エザーフェは主に所有関係を表す修飾で使われ、名詞による名詞修飾の場合は“名詞属格＋被修飾名詞”の構造をとる。しかし、エザーフェが次の(28)のように所有関係ではない場合にも使われることがある。

(28) emš-iin      xuušan'-iin' (Poppe 1960: 111)

医者-gen    古い-3sg.poss

“医者の（中で）一番年取ったの”

(28)のような例は被修飾語が名詞的に振舞う形容詞であったり、最上級を表す傾向があるなど、自由に取れる修飾方法ではないが (Poppe 1960: 111)、エザーフェが所有関係以外の修飾でも使われる手段であることを示すものと言える。

いずれにせよ、ヤクート語やブリヤート語においては、関係節と被修飾名詞をエザーフェによってより明確に示すという共通の特徴が見える。つまり、人称接辞が動詞の主語を標示するとともに、エザーフェとして関係節と被修飾語を強く結びつけることで名詞句全体を明示する役割を担っていると言えることができるだろう。また、修飾語＋被修飾名詞という語順にほとんど揺れないヤクート語やブリヤート語においては、エザーフェが関係節を含む名詞句の最後を示すという点もあると言える。

<sup>35</sup> 例えば形容詞＋名詞という構造の場合は、ヤクート語・ブリヤート語でともに並置によって表される。

<sup>36</sup> チュルク諸語では“名詞-属格＋名詞-人称接辞”が基本的な型であるのに対し、ヤクート語では、“名詞- $\phi$ ＋名詞-人称接辞”という型が名詞結合の基本となった (庄垣内 1989: 949)

一方、エヴェンキ語は語の結合方法としてエザーフェと一致<sup>37</sup>を持つ。この一致という方法も、修飾語が被修飾語と同じ数・格の接辞をとるという形式である為、修飾語を含む名詞句全体を明示する役割を持っていると見る事が出来る。特に、本論文に挙げた例文にも見られるように語順が比較的自由であるエヴェンキ語においては、どの語が修飾語と被修飾語の関係にあるかを明示するのに役立つと言えよう。

以上のように形動詞形に見える人称接辞から、ヤクート語とブリヤート語では人称接辞の役割として、**主語を標示**することと、**文内における句、節などを明確に示す**という2つの特徴があることが分かる<sup>38</sup>。このことは副動詞形に人称接辞を取るということと大きく関係していると見る事ができるのではないだろうか。つまり、副動詞形に主語と一致する人称接辞を付けることで主語を標示するとともに、従文であることをも示していると見るのである。また、エヴェンキ語と違い、従文が主文の前にくる語順にほとんど揺れないヤクート語やブリヤート語では、従文の最後を示すということも指摘できるだろう。一方で、従文の位置が比較的自由なエヴェンキ語においては、副動詞形に付く人称接辞は主語を標示することがより重要な役割であると言えることができる。

ヤクート語やブリヤート語の人称接辞について、文内における句、節などを明確に示すという特徴は、定動詞形に付く人称接辞（つまり述語人称接辞）も含めれば、より広く人称接辞一般に見られる特徴とすることが出来る。定動詞形に付く人称接辞も文を明確に示し、文の終わりを示していると見る事が出来るからである。

以上より、②に対する答えとして、「ヤクート語やブリヤート語の人称接辞には主語を標示する役割だけでなく、句・節・文といったある一定のまとまりを明確に示すという役割も持っていた。この人称接辞の役割が、副動詞形に人称接辞を付けるという特徴を受け入れる際に、副動詞形によって作られる従文を明確に示す役割にも援用された」という理由を考えることが出来るだろう。

## 6 まとめ

副動詞形に人称接辞が付くという特徴は、モンゴル諸語において発生的に、またモンゴル諸語との接触によってヤクート語においても持っていた可能性があるが、双方ともエヴェンキ語との接触によって借用したか或いはその特徴を強められるに至った。その要因として、ヤクート語やブリヤート語において人

<sup>37</sup> 註 31 参照。

<sup>38</sup> このような人称接辞の役割が伴言語的にヤクート語やブリヤート語にだけ見られる特徴であるということではない。類型論的に“強く”現れているということを強調したい。

称接辞が、形動詞形による関係節の構文に見られるように、主語を標示するという機能だけでなく一つの句・節・文の区切りを明示するという機能をも持っていた。この人称接辞の機能が副動詞形によって構成される従文へも及び、エヴェンキ語からより影響を受けやすくなっていたという可能性が考えられる。

本論文では主に文法書に現れる例文を使い、人称接辞付く副動詞形を見てきた。母語話者に対して調査が可能ならば、次のことが解明されると予測される。

- ・ ヤクート語やブリヤート語では人称接辞が任意に現れているが、人称接辞が付く場合と付かない場合とで何らかの傾向や条件があるのかどうか
  - ・ 従文の長さ、基本的な語順と異なる語順、同主語・異主語が共存する複数の従文の存在などと、人称接辞の役割について何らかの関連があるのかどうか
- これら問題点は今後の課題としたい。

## 略号

1, 2, 3	1,2,3 人称	instr	具格
abl	奪格	loc	位格
acc	対格	neg	否定
accd	定対格	nfut	非未来
accin	不定対格	part	形動詞形
all	場所格	pcle	助詞
conv	副動詞形	perf	完了(相)
dat	与格(・与位格)	pl	複数
exc	排除形	poss	所有人称接辞
gen	属格	prs	現在
hab	習慣(相)	pst	過去
imp	命令形	Q	疑問助詞
impf	不完了(相)	refl	再帰所有接辞
inc	包括形	sg	単数
ingr	開始(相)		

## 例文引用元の略号

例文はほぼ全て参照文献より引用した。例文の後に括弧内で示されているものがその引用元を示している。以下にその省略記号について説明する。

N(数) : I. Nedjalkov (1997)全ての例文に番号が振ってある為、頁ではなくその番号を付して示す。また、他の文献と表記を合わせる為に書き換えた文字があるので、ここに示しておく：

(Nedjalkov による表記：本論文での表記) e:ə, y:i, ch:č, d'j, j:y

Kl : Колесникова (1966)、Sk : Skribnik (2003)、Ub : Убрятова (1976)、Kr : Коркина (1985)、SM : Stachowski and Menz (1998)、小沢 : 小沢(1968)、勝田 : 勝田(2001)

## 参考文献

### ●和文

- 池上 二良 1989 「第1部 多様な民族文化 第Ⅲ章 東北アジアにおける言語の変遷 1 東北アジアの土着言語、2 東北アジアの言語分布の変遷」三上次男・神田信夫編『東北アジアの民族と歴史』山川出版社、東京
- 荻原 眞子 1989 「第1部 多様な民族文化 第Ⅱ章 民族と文化の系譜」三上次男・神田信夫編『東北アジアの民族と歴史』山川出版社、東京
- 小沢 重男 1963 『モンゴル語四週間』大学書林、東京
- (訳注) 1968 『モンゴル民話集』大学書林、東京

- 風間 伸次郎 2003 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのかー対照文法の試みー」アレキサンダー・ボビン／長田俊樹共編『日本語系統論の現在／Perspectives on the Origins of the Japanese Language』(日文研叢書31) pp.249-340、国際日本文化研究センター
- 加藤 九祚 1986 『北東アジア民族学史の研究』恒文社、東京
- 勝田 茂 2001 『トルコ語文法読本』大学書林、東京
- 栗林 均 1989 「シラ・ユグル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻【世界言語編】』pp.262-268、三省堂、東京
- 1992a 「保安語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第3巻【世界言語編】』pp.88-92、三省堂、東京
- 1992b 「モンゴル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第4巻【世界言語編】』pp.492-498、三省堂、東京
- 庄垣内 正弘 1987 「ヤクート」『月刊言語』Vol.16, No.10, pp.50-55、大修館書店、東京
- 1989 「チュルク諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第4巻【世界言語編】』pp.937-950、三省堂、東京
- 1992 「ヤクート語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第4巻【世界言語編】』pp.544-550、三省堂、東京
- 藤代 節 1989 「ドルガン語の成立過程について一言語接触の観点からー」『内陸アジア言語の研究』第5巻 pp.155-184、アジア大陸の言語研究班(神戸市外国語大学)、神戸
- 水野 正規 1995 「現代モンゴル語の従属節主語における格選択」『東京大学言語学論集』14, pp.667-680、東京大学文学部言語学研究室、東京
- 宮脇 淳子 2002 『モンゴルの歴史ー遊牧民の誕生からモンゴル国まで』(刀水歴史全書59)刀水書房、東京
- ヤンフネン、ユハ 1983 「北アジアの民族と言語の分類」『月刊言語』Vol.16, No.10, pp.46-53、大修館書店、東京
- 露文
- Василевич, Г. М. 1958. *Эвенкийско-русский словарь*. Государственное издательство иностранных и национальных словарей, М
- Колесникова, В. Д. 1966. *Синтаксис эвенкийского языка*. АН СССР, Л
- Коркина, Е. И. 1985. *Деепричастия в якутском языке*. Академия НАУК СССР Сибирское отделение якутский филиал институт языка, литературы и истории. Новосибирск
- Романова, А. В., Мыреева, А. Н., Барашков, П. П. 1975. *Взаимовлияние эвенкийского и якутского языка*. Наука, Л

Убрятова, Е. И. 1976. *Исследования по синтаксису якутского языка II. Сложное предложение*. Наука, Новосибирск

Харитонов, Л. Н. 1982. *Грамматика современного якутского литературного языка*. Наука, М

● 英文・他

Bosson, J. E. (supervised and edited by Nicholas Poppe) 1962. *Buriat Reader*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 8, Mouton, The Hague

Haspelmath, M. 1995. 'The Converb as a Cross-linguistically Valid Category' in M. Haspelmath and E. König (eds) *Converbs in Cross-linguistic Perspective. Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms – Adverbial Participles, Gerunds*. (Empirical Approaches to Language Typology 13) pp. 1-55, Mouton de Gruyter, Berlin, New York

Janhunen, J. (ed) 2003. *The Mongolic Languages*. Routledge, London and New York

Johanson, L. 1998. 'The Structure of Turkic' in L. Johanson and É. Á. Csátó (eds) *The Turkic Languages*. Routledge, pp. 30-66, London and New York

Kałużyński, St. 1962. *Mongolische Elemente in der jakutischen Sprache*. Warszawa

Nedjalkov, I. 1997. *Evenki*. Routledge, London and New York

Nedjalkov, V. P. 1995. 'Some Typological Parameters of Converbs' in M. Haspelmath and E. König (eds) *Converbs in Cross-linguistic Perspective. Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms – Adverbial Participles, Gerunds*. (Empirical Approaches to Language Typology 13) pp. 97-136, Mouton de Gruyter, Berlin, New York

Poppe, N. N. 1960. *Buriat Grammar*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 2, Mouton, The Hague

Skribnik, E. 2003. 'Buryat' in J. Janhunen (ed) *The Mongolic Languages*. pp. 102-128, Routledge, London and New York

Stachowski, M. and A. Menz. 1998. 'Yakut' in L. Johanson and É. Á. Csátó (eds) *The Turkic Languages*. pp. 417-433, Routledge, London and New York

要旨

**Деепричастия с личными окончаниями  
в эвенкийском, якутском и бурятском языках**

**МАЦУМОТО Рё**

Эвенкийский язык, широко распространенный в Восточной Сибири, в процессе исторических передвижений эвенков контактировал с якутским и бурятским языками.

В якутском языке личные окончания могут присоединяться к деепричастиям, и этим якутский язык отличается от других тюркских языков. На этой особенности я хочу остановиться в данной статье. До сих пор считалось, что данное явление – результат влияния эвенкийского языка. Однако бурятский язык тоже обладает этой особенностью. В связи с этим я хочу попытаться типологически сравнить личные окончания глаголов этих языков.

На основании проведенного сравнения можно сделать следующий вывод: существует возможность, что данная особенность была изначально присуща бурятскому языку, а в якутском языке она появилась в результате контакта с монгольскими языками. Но можно также предположить, что в обоих языках эта особенность или была заимствована в результате контактов с эвенкийским языком, или же, уже имеясь, усилилась в результате этих контактов. В якутском и бурятском языках личные окончания указывают не только на подлежащее, но и на конец предложения, границу между главным и придаточным предложением, а также на границу между словосочетаниями, как, например, в причастном обороте. Такая роль личных окончаний могла подготовить почву для успешного взаимодействия с эвенкийским языком.

(受理日 2005 年 7 月 1 日)